

ローカルSDGs/地域循環共生圏セミナー@中部



ソーシャル・プロジェクトを 成功に導く発想と技法

SDGsの本質に対応し、
「国連・ESDの10年」の経験を活かす

@ZOOM

主催:環境省中部

環境パートナーシップオフィス(EP0中部)

2022年12月15日

佐藤真久

東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授
m-sato@tcu.ac.jp/masahisasato@hotmail.com



企業

企業に求められる
“地域の課題対応力”

“企業主導の事業開発”の限界

自社⇄顧客
自社(新技術→応用分野の検討)⇄顧客
自社×パートナー企業→顧客

社会課題の現場(状況・文脈)の理解のために求められる当事者との深い関係づくり。多様なステークホルダーとともにプロジェクトを起こし、関わる人たちの参画を促しながら、問題の理解を深め、潜在ニーズを把握し、解決策を動的に改善していくアプローチ。

財務資本中心の事業開発から、
資本(財務・知的・製造・人的・社会関係・自然)の統合・好循環へ

自治体

地方行政に求められる
“地域の課題対応力”

民間の経営手法を公的部門に応用し、 公的部門の運営の合理化を図る “New Public Management(NPM)”の限界

これからは、自治体の複数部署、多様な分野・領域の専門家、課題の現場にいる地域住民等、様々な人たちが知恵を持ち寄り、表面化した問題・課題の背景にある構造や相互作用、意味の多面性、時間のなかでの変化にまで視野を広げて、“複雑な問題”の解決に向けてアイデアを出し合うといった、“真の課題と解決のあり方を模索していく参画プロセス”がますます重要。

“市民参加”の発想から“行政参加”の発想へ

企業

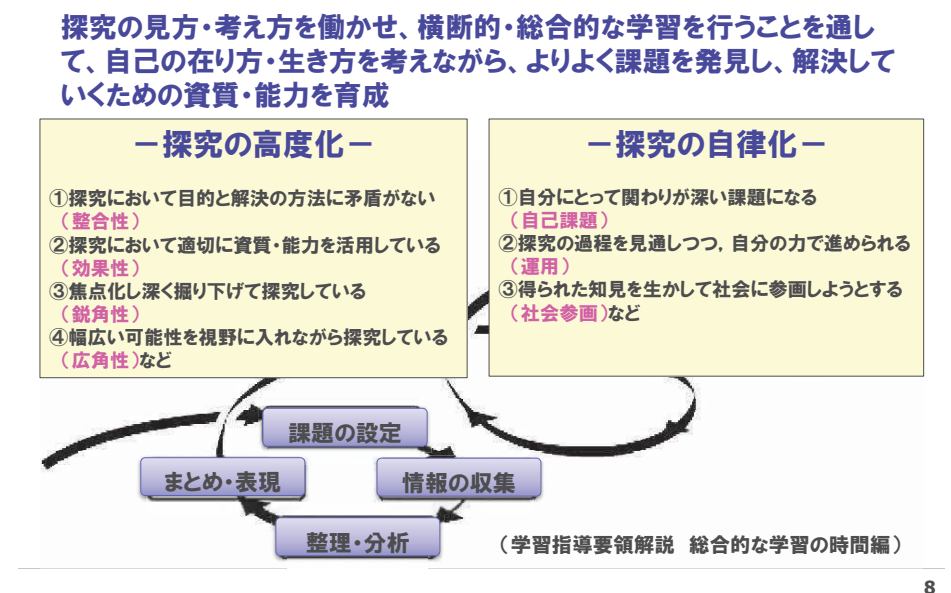
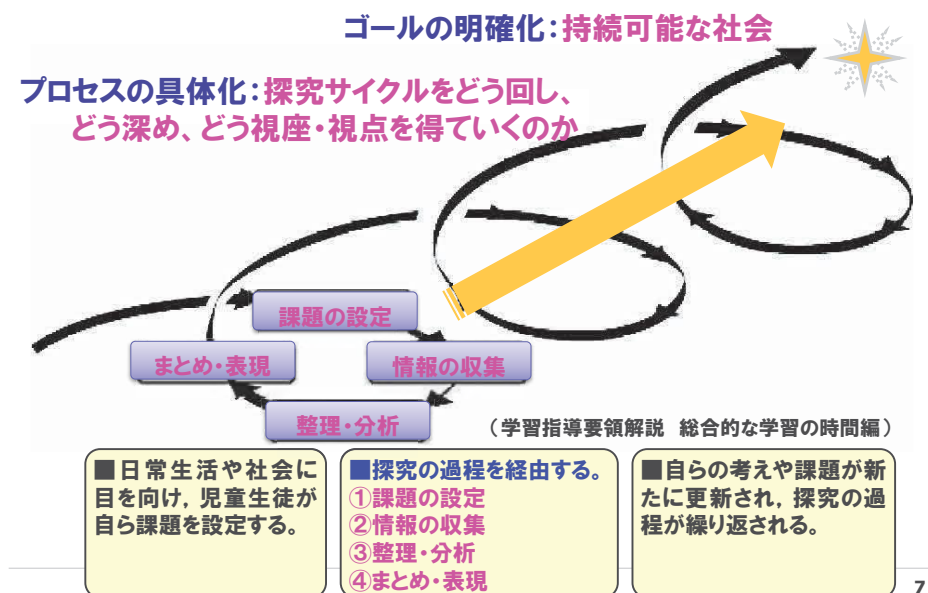
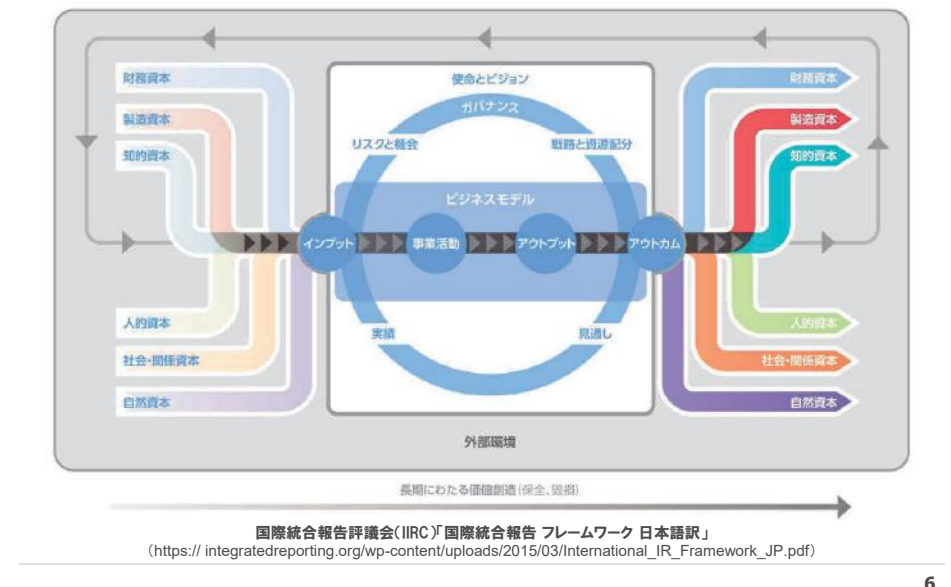
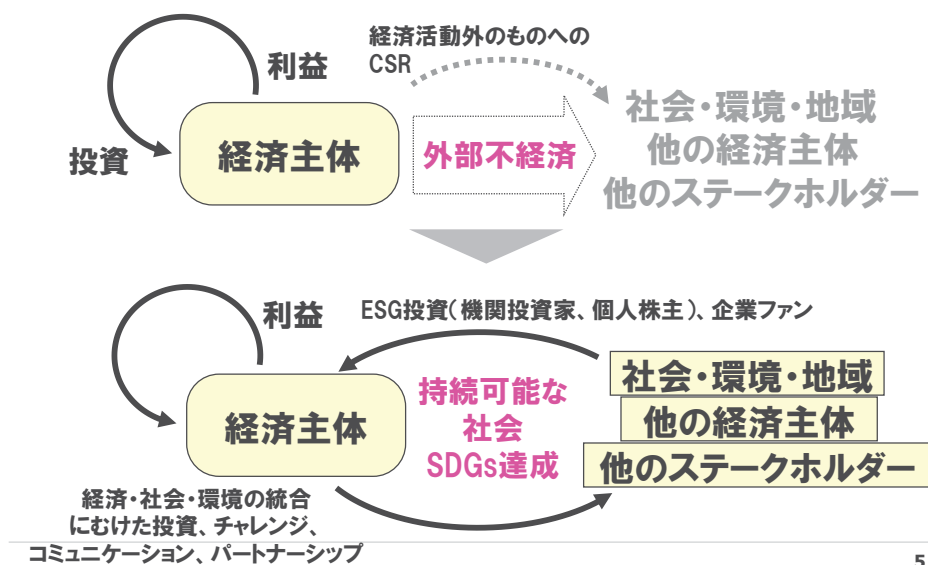
企業に求められる
“地域の課題対応力”

ステークホルダー資本主義

社会的弱者を支え、環境を保全し、新技術に対応した
マクロ経済、ミクロ経済、個人のリセットの重要性

- ・ テクノロジー—第4次産業革命技術をポジティブな変化に活用する
- ・ 地域開発の見直し—地域経済の立て直し、地域循環経済、都市の持続可能性の構築
- ・ グローバル協調の再生—機能する多国籍組織、グローバル・バリューチェーンの再構築
- ・ 社会契約、スキル、仕事の再設計—AI等と共存する新しい仕事の創造、リスク、つながりへの投資
- ・ 健全な自然環境の回復—モビリティの見直し、公共交通、歩いて暮らす街
- ・ 持続可能なビジネスモデルの構築—再生可能エネルギー、サプライチェーンの見直し、環境再生型(Regenerative)製品開発

グレートリセット(WEF、ダボス会議)〜外部・他者の内部化(新自由主義経済の問い直し)



地域社会

地域社会に求められる “地域の課題対応力”

[学校]

“児童生徒の未来”

キーワード: 社会に開かれた教育課程、育成を目指す資質・能力、探究、対話的・主体的・深い学び、持続可能な社会の担い手、学社連携、校種間連携、能力・態度、開発型知性／制御型知性、人格形成、社会的・情動的知性(思いやり、共感、マインドフルネス、批判的探究)、ホールスクール..

[学術・研究機関]

“高等教育と研究の深化”

キーワード: 研究・教育における国際化、研究開発、問題解決能力、THE大学インパクト・ランキング..

[地縁組織]

“地域の未来”

キーワード: 住民自治、小規模多機能自治、コミュニティの崩壊、少子高齢化、世代間コミュニケーション、社会教育..

[NPO/NGO/協同組合]

“当事者への寄り添い”

キーワード: グローカルな社会課題、政策提言、社会課題解決、価値創造、パートナーシップ、相互扶助参加のしくみ、協働のしくみ、貧困・社会的排除問題、地球環境問題、人権に基づくアプローチ、主体形成..

[企業]

“事業採算性とビジネス・モデル”

キーワード: SCOPE3、アウトサイドイン、バリューチェーン、労働環境、ISO26000、Society 5.0、AI、IoT、国連グローバルコンパクト、SDGsコンパス、経営統合、マテリアリティ、地域企業、100年企業、競争から共創へ、製品開発／価格戦略／市場開発／販促・コミュニケーション、KPI／OKR、統合報告、共用品推進、財務／非財務、ESG投資

[自治体]

“公平性と社会的包摂”

キーワード: 社会生態モデル、政策協働、地域の社会課題、脆弱な財政基盤、老朽化する社会インフラ、自然災害、少子高齢化、NPMの限界、消滅自治体、学習する都市、包括的ケアシステム、市民参加から行政参加へ..

中長期的な機会とリスク 求められる“変容”

SDGsの本質 社会背景、特徴、世界観

グローバルで複雑な問題群 (Global Problematique)

気候変動

ユースの雇用問題

教育の質

自然災害

高齢化

エネルギー問題

生物多様性喪失

水問題(質、量、アクセス)

グローバルな金融・経済危機

ガバナンス

肥満

貧困格差

社会的公正

紛争

人工知能に奪われる職

COVID-19パンデミック

持続可能な社会の構築にむけて ～開発アプローチの変遷(佐藤真久, 2020)

1940s 1950s 1960s 1970s 1980s 1990s 2000s 2010s 2020s 2030s

経済開発
第1次国連開発の10年(1960-70)
第2次国連開発の10年(1971-80)
第3次国連開発の10年(1981-90)
第4次国連開発の10年(1991-2000)
第5次国連開発の10年(2001-10)
第6次国連開発の10年(2011-20)

社会開発
第1次国連開発の10年(1960-70)
第2次国連開発の10年(1971-80)
第3次国連開発の10年(1981-90)
第4次国連開発の10年(1991-2000)
第5次国連開発の10年(2001-10)
第6次国連開発の10年(2011-20)

人間開発
第1次国連開発の10年(1960-70)
第2次国連開発の10年(1971-80)
第3次国連開発の10年(1981-90)
第4次国連開発の10年(1991-2000)
第5次国連開発の10年(2001-10)
第6次国連開発の10年(2011-20)

持続可能な開発
国連人間環境会議(1972)
国連環境開発会議(1992)
地球憲章(2000)
持続可能な開発目標(SDGs: 2016-2030)

他者・外部のないグローバル化の時代



—社会背景—

- ①2000年とは異なる
社会問題・時代背景
- ・ 大加速化の時代
 - ・ 他者・外部のないグローバル
ゼーションの時代
 - ・ 地球惑星の時代
 - ・ 混成文化の時代
 - ・ 人間由来の自然変化(人新世)
- ②ありたい社会と
ありうる社会
- ・ VUCA(変動・不確実・複雑・曖
昧)の時代

—世界観—

- ①地球惑星の世界観
- ・ Planetary Boundaries
 - ・ 地球の限界
- ②社会包摂的世界観
- ・ No One Left Behind
 - ・ 誰一人取り残さない
- ③変容の世界観
- ・ Transformation
 - ・ 変える・変わる

—特徴—

- ①“複雑な問題”への対応
- ・ テーマの“統合性・同時解決性”
 - ・ パートナリシップ
- ②“共有された責任”としての参画
- ・ 万国・万人に適用される普遍性・公平性
 - ・ ステークホルダーの役割
- ③求められる“透明性”
- ・ モニタリング指標の設定
 - ・ 定期的フォローアップ

SDGsの本質:変容



Transforming our world :
the 2030 Agenda for Sustainable Development
誰一人取り残されない世界をつくる決意

- 我々は、すべての人々のためによりよい未来を
作る決意をする。
 - 我々は貧困を終わらせることに成功する最初の
世代になり得る。
- 同様に、地球を救うチャンスを持つ最後の世代
にもなるかもしれない。(2030アジェンダ 50)



©国連広報局



日本の社会課題
(227事例、31課題、
500強事例)
社会課題解決マップ
(ETIC.)



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 01. [直] やり直しばい日本社会 | 17. [組] 解放せよ組織内リーダーシップ |
| 02. [貧] 先進国なのに高い相対的貧困率 | 18. [専] 専門職が力を発揮できない職場環境 |
| 03. [糧] 日本でも起きている食料問題 | 19. [技] 伝統文化・技術をどう継承するか |
| 04. [齢] 日本が一步先ゆく超高齢化社会 | 20. [資] 日本中に眠る未利用資源 |
| 05. [減] チャンスに変わるか？人口減少 | 21. [朽] 老朽化が進むインフラ |
| 06. [少] マイノリティの人々の幸せ向上 | 22. [災] 自然災害大国日本 |
| 07. [保] 膨れ上がる社会保障費 | 23. [地] 見直したいローカル経済 |
| 08. [育] 安心して産み育てられる社会 | 24. [漁] 復活できるか水産王国日本 |
| 09. [独] 希薄化・孤独化するコミュニティ | 25. [環] 止まらない気候変動 |
| 10. [健] 延ばしたい健康寿命 | 26. [政] 非効率すぎる政治・行政 |
| 11. [創] 創造力を高める教育の拡大 | 27. [社] 社会づくりに参加しやすく |
| 12. [教] じわじわ広がる教育格差 | 28. [幸] 時代に合わせた幸せの模索と実現 |
| 13. [運] 日本は真のスポーツ大国になれるか | 29. [和] くい止めたい不信と不和の連鎖 |
| 14. [水] 世界が注目する水資源問題 | 30. [経] グローバルでつながる経済の課題 |
| 15. [燃] 持続可能なエネルギーの実現と普及 | 31. [心] 高ストレス型社会からの脱却 |
| 16. [活] 出番を求める人々に活躍の機会を | |

持続可能な開発ソリューション・ネットワーク(SDSN:Sustainable Development Solutions Network)
とベルテルスマン財団(Bertelsmann Stiftung)によって毎年作成



→日本は19位で、昨年の18位、17位、15位と年々連続で順位を落としている。後退は、陸地生態系の保全。
→スビルオーバー・スコア(他国への波及効果)は、OECD加盟国の平均と比較しても若干低い。
→「分断」がもたらす弊害ー縦割り組織の分断、官民の分断、現在と未来の分断、地域間の分断、世代の分断、ジェンダーの分断
(<https://sdgslocal.jp/local-sdgs/>)

<https://s3.amazonaws.com/sustainabledevelopment.report/2021/2021-sustainable-development-report.pdf>

③動的で包括的なSDGsへ
(価値共創・統合的問題解決ツールとしてのSDGs)

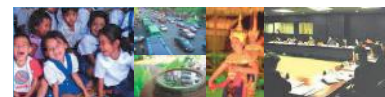
②相互関連のSDGsへ
(複雑性の発見)

①個々のSDGへの
タグ付けから
(目標対応型)





SDGsをツールとして活かす ～統合的アプローチ



例:環境・経済・社会の統合的理解(地域の統合的問題解決)



環境省:SDGsを活用した地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
全国キックオフ会合におけるテーマ統合性・同時解決に向けた議論風景(筆者撮影)

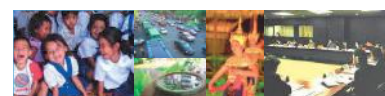


SDGsをツールとして活かす ～統合的アプローチ

例:環境・経済・社会の統合的理解(企業経営)

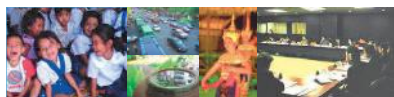


SDGsをツールとして活かす ～文脈的アプローチ



例:社会課題解決中マップ(日本課題とSDGsとの関連づけ)





SDGsをツールとして活かす ～文脈的アプローチ

例: ミステリー(世界と地域で直面する課題の関連づけ)



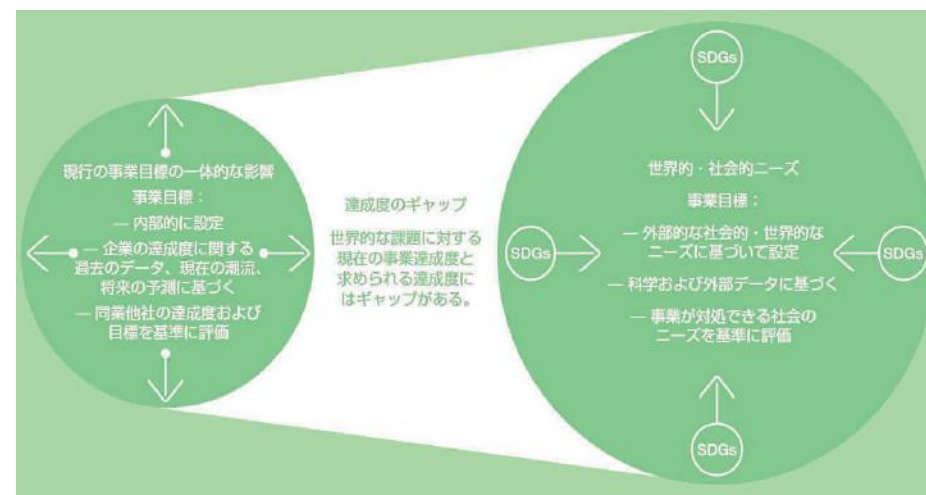
脱炭素のためのまちづくり・人づくりワークショップ
主催: 環境省EPO中部・中部地方ESD活動支援センター@福井県大野市 結トピア

25

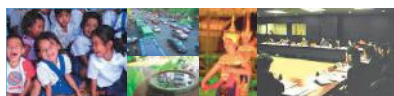


SDGsをツールとして活かす ～批判的アプローチ

例: アウトサイド・イン・アプローチ(外部目線による企業経営)



26



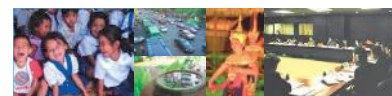
SDGsをツールとして活かす ～批判的アプローチ

例: 多角的理解(多角的視点に基づく事象の理解)



主催: 独立行政法人国際協力機構 東京国際センター (JICA東京)
後援: 外務省 文部科学省 東京都教育委員会 一般財団法人東京私立中学高等学校協会

27



SDGsをツールとして活かす ～変容的アプローチ

例: SDGsを活かした変える(社会)・変わる(個人)の連動性

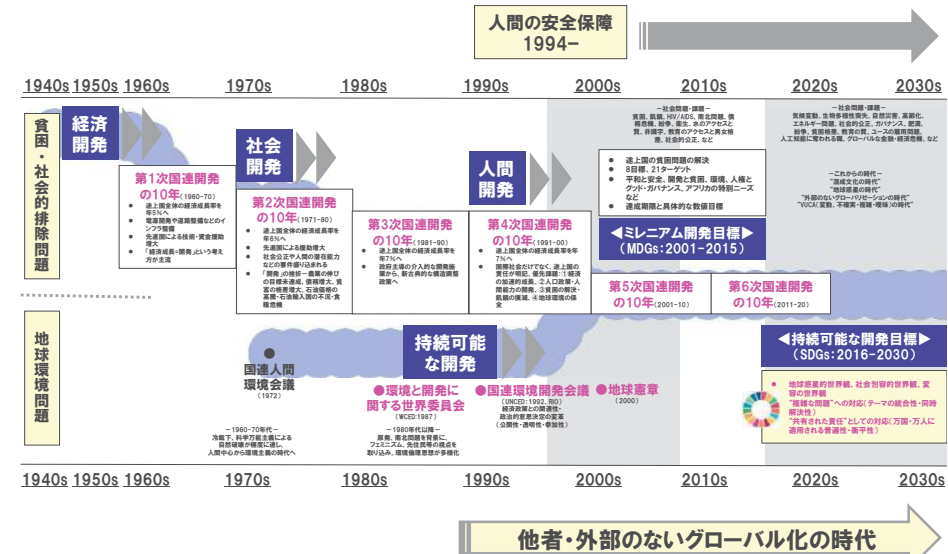


UNESCO (2020)

28




SDGsを人間安全保障として捉える (権利)



人間の安全保障アプローチとは

HUMAN SECURITY




TOWARDS AGENDA 2030
FREEDOM FROM WANT
FREEDOM FROM FEAR
FREEDOM TO LIVE IN DIGNITY
人間の安全保障を考えるアプローチ

0:03 / 4:01



- ・ (People-centered) 人間一人ひとりに着目し、
- ・ (Comprehensive) 包括的で、
- ・ (Context-specific) 状況や地域に応じて、
- ・ (Prevention-oriented) 問題予防の観点から、
- ・ (Protection) 深刻な脅威から人々を守り、
- ・ (Empowerment) 人に力を与える

**人間の安全保障・人権／共生・参画社会の実現／
持続可能な社会の実現／誰ひとり取り残さない／
他者・外部の内部化／防災、地域づくり、多文化共生**



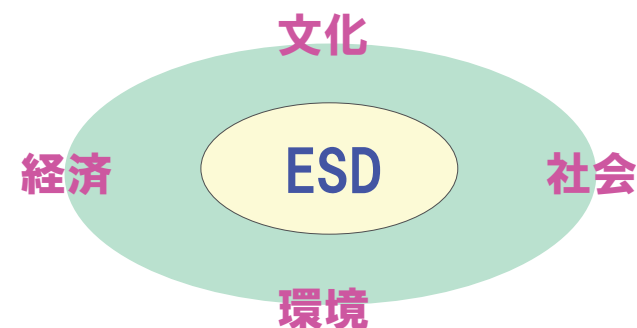
「国連・ESDの10年」の経験 GAP、ESD for 2030

33



ESDの意味するところ

ESD:持続可能性に関する諸課題とESD

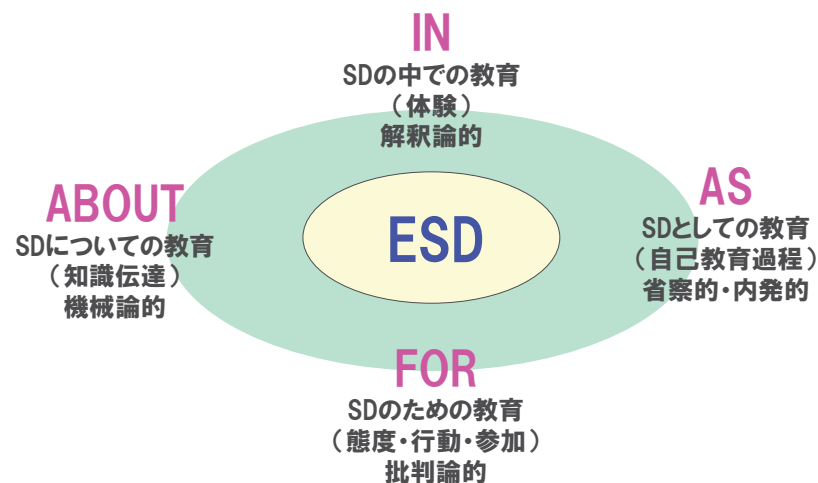


34



ESDの意味するところ

ESD:異なる位置づけ(About、In、For and As)

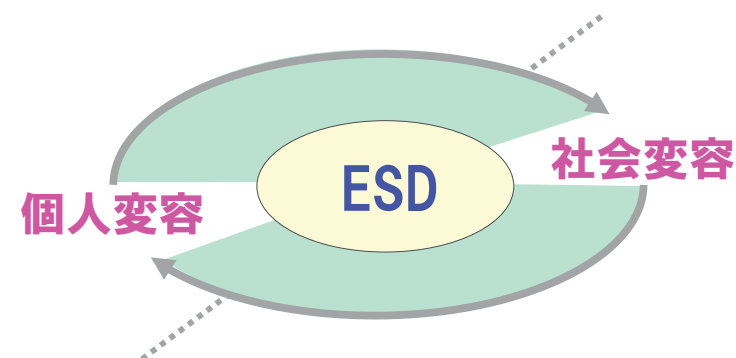


35



ESDの意味するところ

ESD:個人変容と社会変容の学びの連関



新しい学習の柱 (UNESCO 2009)
“Learning to Transform Oneself and Society”

佐藤(2016)訳:個人変容と社会変容の学びの連関

36

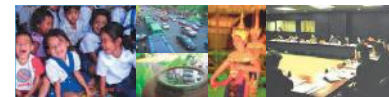
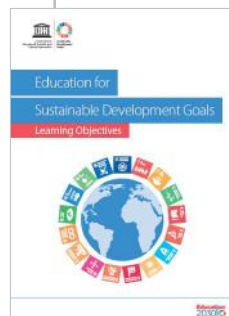


SDGsのための教育(UNESCO, 2017)
～“持続可能性キー・コンピテンシー”

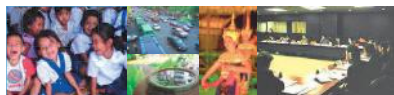
The following key competencies are generally seen as crucial to advance sustainable development (see de Haan, 2010; Rieckmann, 2012; Wiek et al., 2011).

社会・情動的知性(SEI)

(マインドフルネス、共感、思いやり、批判的探究)



社会的生態系
順応的協働的ガバナンス
社会的学習



線形的思考の限界 ～“複雑な問題”をシステムとして捉える

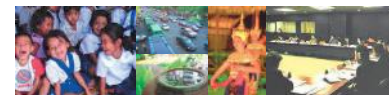
はじめに



むかしむかし、ある村で、
 たくさんの人が飢えや貧しさで困っていました。
 それは悪魔が人々の食べ物を奪っていくからでした。
 その村に一人の勇者がやって来ました。
 勇者は人々が苦しんでいるのを見て、
 彼らを助けようと悪魔に戦いを挑みました。
 勇者は悪魔と戦い、ついに悪魔を退治しました。
 そして、村はみな豊かになり暮らができるようになり、
 誰もが幸せに暮らしました。

このおとぎ話で、勇者が村の人たちを助けることができたのは、なぜでしょう？

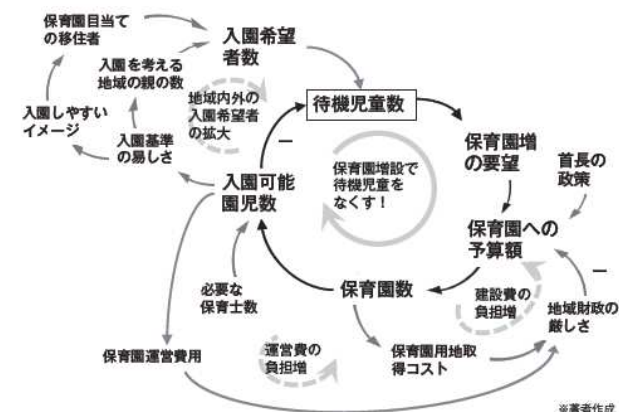
悪魔に挑む勇気があったから？ 悪魔に勝てるだけ強かったから？

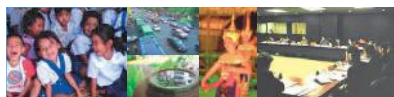


線形的思考の限界 ～“複雑な問題”をシステムとして捉える

図2-2 保育園の待機児童問題のループ図モデル(一部)

待機児童に関する要因を、システム思考で使うループ図を使って分析している例。
中央の「保育園増設で待機児童をなくす!」というループで問題解決を実施すると、
一見、解決に向かいそうだが、地域内外の入園希望者の拡大、運営費、建設費の負担増など、
副作用ループが連れて発生し、問題解決を難しくすることになる。





“複雑な問題”とその問題解決 ～その意味するところ



▶ 世界の問題は複雑なシステム(問題群)

- ・ 世界の問題(問題群)もシステムで解決
- ・ 多様な主体とのパートナーシップが前提

▶ 線形的な思考の限界

- ・ 分業化・専門特化の弊害
- ・ システム思考(因果ループ、時間的変化、異なるメンタルモデル)を活かした課題解決
- ・ 異なるメンタルモデルを活かした動的(dynamic)で、包括的(inclusive)な、力を持ち寄る(collective)協働へ

▶ 問題の解決する姿

- ・ 個々の課題解決(分業化と自己責任論に基づく)から、問題がおきづらい構造、起きてても対応できる構造を整える必要性

41



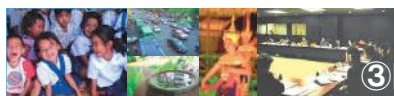
『ソーシャル・プロジェクトを 成功に導く12ステップ』—書籍紹介

表1-1 社会生態モデル(Social Ecological Model)

1) Individual (個人)	個々人の知識・意識・スキル
2) Interpersonal (個人間)	家族・友人・相談相手の生活習慣・知識・行動
3) Organizational (組織)	会社・学校などの環境・慣習・方針、地域の専門機関の状況
4) Community (コミュニティ)	大学・研究機関、メディア、企業、地域社会などが影響する文化的価値、規範、社会通念
5) Policy (法律・政策)	法律・政策・計画、それらが地域やビジネスに与える影響

※ ODC 資料に基づき著者作成

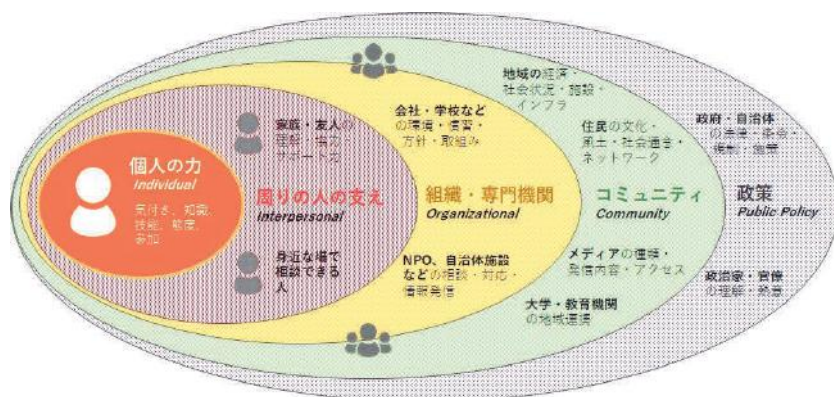
42



地域探究の高度化・自律化

③ 問題が解決した状況の考え方をシフトする

困難な状況にいる個人を教育、支援をしても、その人が力を発揮し、良い状況をつくるには、多層的な人・組織・制度などが連動している必要がある。



※ Combined capability の概念と、CDC「Social Ecological Model」を組み合わせ、著者ら作成

43



連携・協働の在り方 ～協働の形態

■ 多様な協働の形態(事業協働、戦略協働、政策協働)

[事業協働・連携]

- (1) 共同で一つの事業を行う協働の形態(共催)
- (2) 「後援」という形で取組に名を連ねること。主に金銭的支出を伴わない協働の形態(後援)
- (3) それぞれの特性を活かし、一定期間継続的に協力して事業を行う協働の形態(事業協力)
- (4) 独自の企画や代案をみんなで提案する協働の形態(企画立案)
- (5) 新しい一つの組織を立ち上げ、そこが主催者となって事業を行う協働の形態(実行委員会)
- (6) 協働事業や課題に関して情報交換や意見交換を行う協働の形態(情報提供・情報交換)
- (7) 優れた特性をもった組織に契約をもってゆだねる協働の形態(委託・指定管理者制度)
- (8) 公益上必要があると認めた場合、行政が公金を支出する協働の形態(補助・助成)

[戦略協働]

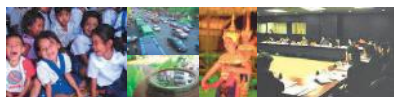
- ・ 共有目的を実現するために戦略的に協働(戦略協議など)を行う形態(戦略協働)

[政策協働]

- ・ 共有目的を実現するために行政と政策的に協働(政策提案など)を行う形態(政策協働)

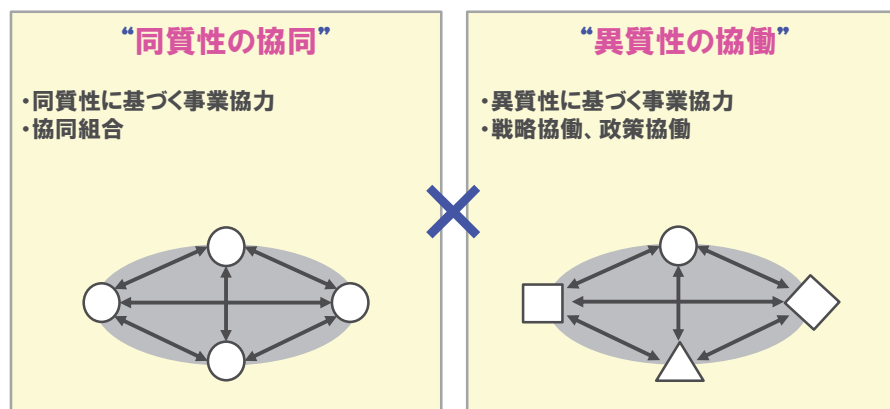
せんだいみやぎNPOセンター(2007)に基づき筆者加筆修正

44



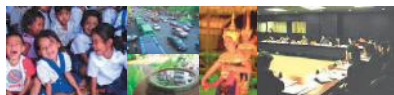
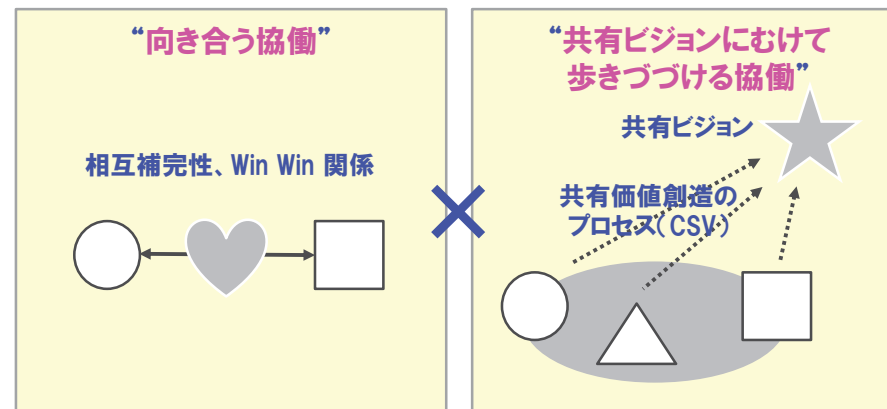
連携・協働の在り方
～同質性の協同・異質性の協働

■同質性の協同、異質性の協働

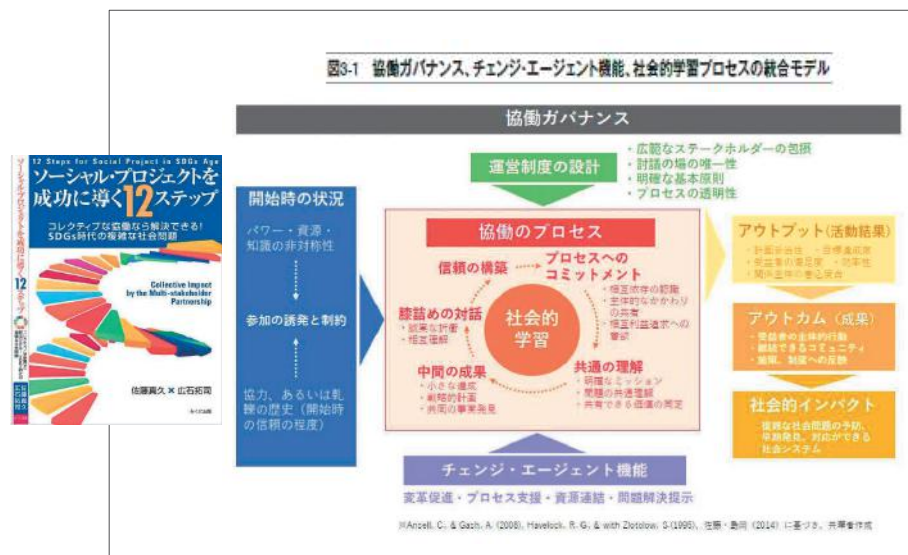


連携・協働の在り方
～向き合う協働、共有ビジョンにむけて歩み続ける協働

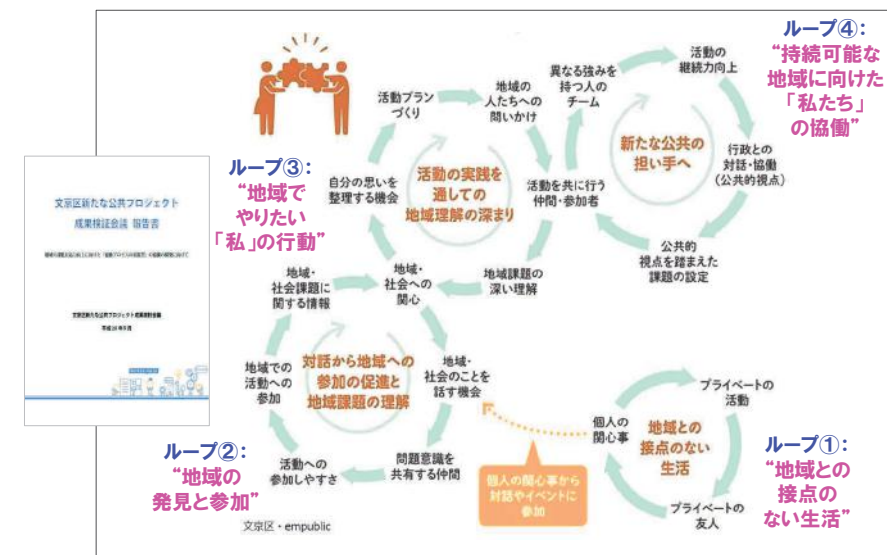
■向き合う協働、ともに歩みつづける協働



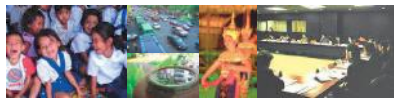
協働のしくみ
(佐藤・広石, 1998)



参加のしくみ
(文京区・empublic, 2016)



「新たな公共の担い手」を育む“参加のしくみ”(文京区・empubic, 2016)



パートナーシップの多義性
—手段、目的、権利として

手段として

例：社会変容にむけた手段として、
SDGsの達成にむけた手段として

パートナーシップの 多義性

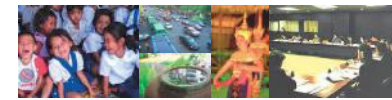
権利として

例：誰一人とり残さない社会づくりのため
の参加の場づくり、包摂的社会づくり、
参加の権利として、基本的人権として

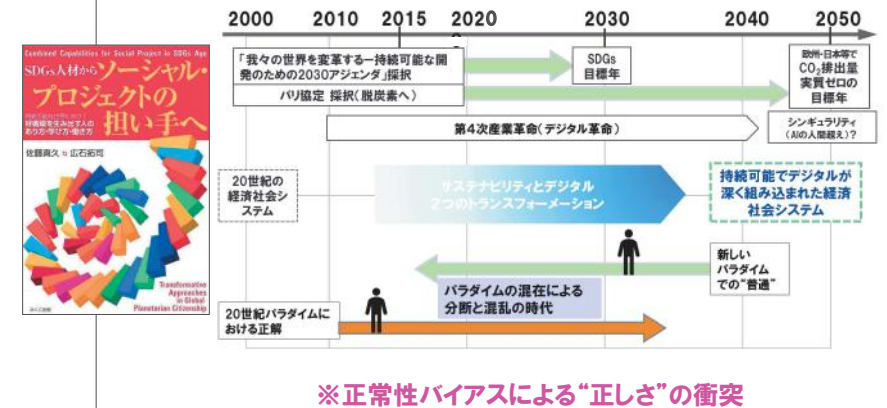
目的として

例：個人の学びを深めるため、
チーム学習を深めるため、社会的関係性の構築、
アイデアの共有、レジリエント社会を構築する、
主体形成

49



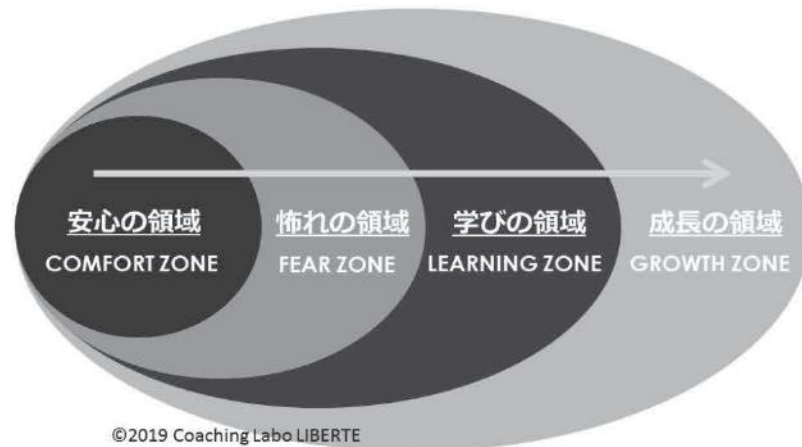
変容の時代に
正解のない問いを共に生きる



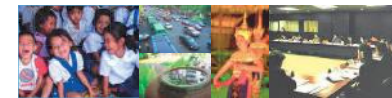
50



求められるコンフォート・ゾーンからの脱却と
越境コミュニケーション



51



参考資料・書籍一式

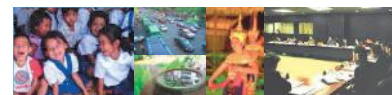
52



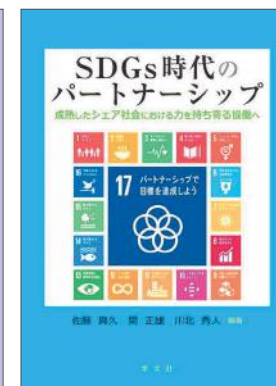
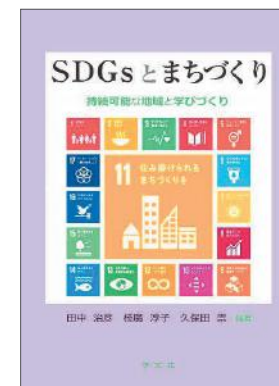
参考：関連書籍紹介
～SDGs基礎・実践シリーズ



53



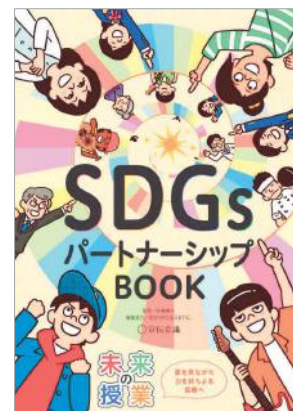
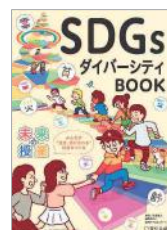
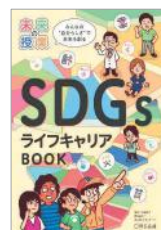
参考：関連書籍紹介
～SDGsと教育シリーズ(学文社)



54



参考：関連書籍紹介
～未来の授業 SDGsシリーズBOOK



※小学校
約20,000校配布
(企業協賛:16社)
2019年11月出版

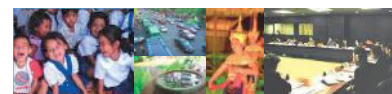
※小中高校
約35,000校配布
(企業協賛:33社)
2020年12月出版

※小中高校
約35,000校配布
(企業協賛:25社)
2021年12月出版

※小中高 約35,000校配布
(企業協賛:31社)
2022年12月出版

発行: 宣伝会議/
監修: 佐藤真久(東京都市大学)

55



参考：関連書籍紹介
～探究×SDGs(朝日新聞)



◆発行: 朝日新聞社/制作: 株式会社 トモノカイ
◆監修: 田村学(國學院大学教授)/佐藤真久(東京都市大学教授)
◆価格: 生徒用 1,500円(税別)/教師用解説書 3,000円(税別)
◆販売対象: 全国の高等学校(中高一貫校を含む)

56



目次

序章 時代の教育改革、人事改革、地域のおける人づくり
[佐藤真久]

第1章 複雑な問題に向き合い、自律と協働を運動させる探究へ
[田村 学]

第2章 教育改革と探究モードへの挑戦
[合田哲雄]

第3章 社会変容と探究モードへの挑戦
[浅野大介]

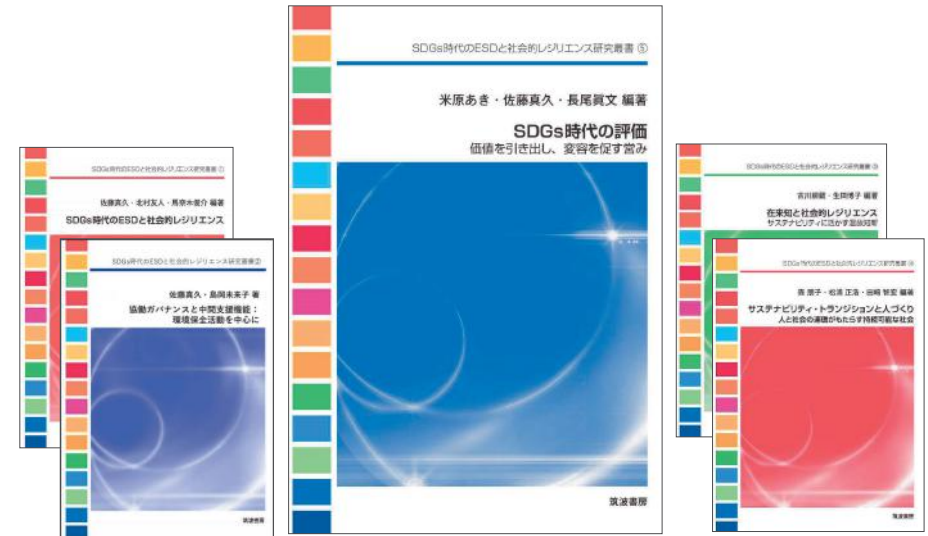
第4章 地域協働と探究モードへの挑戦
[田淵六郎]

第5章 OECDにおける「探究」の考え方
[白井 俊]

第6章 UNESCOと人づくり
[佐藤真久]

終章 SDGs時代の探究モードの拡充に向けて
[佐藤真久]

[編著者] 田村学(國學院大學人間開発学部教授)/佐藤 真久(東京都市大学大学院環境情報学研究科教授)
[著者] 合田哲雄(内閣府科学技術イノベーション推進事務局審議官)/浅野大介(経済産業省商務・サービスグループサービス政策課長(兼)教育産業室長・スポーツ産業室長)/田淵六郎(上智大学総合人間科学部教授)/白井俊(文部科学省文部科学省国際統括官付国際戦略企画官)



58



筑波大学第二群生物学類卒業、同大学院修士課程環境科学研究科修了。英国国立サalford大学にてPh.D.取得(2002年)。地球環境戦略研究機関(IGES)の第一・二期戦略研究プロジェクト研究員、ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)の国際教育協力シニア・プログラム・スペシャリストを経て現職。現在、UNESCO ESD-Net 2030 フォーカルポイント、UNESCO Chair(責任ある生活とライフスタイル)国際理事会理事、JICA教師海外研修(SDGs)学術アドバイザー、文部科学省・WWLコンソーシアム構築支援事業運営指導委員、東京大学附属学校教育高度化・効果検証センター協力研究員、ESD活動支援センターネットワーク可視化委員会座長、SEAMEO-JAPAN ESDアワード国際審査委員会委員、IGES-UNEP環境技術連携センター・テクニカルオフィサー、IGESシニアフェローなどを務める。協働ガバナンス、社会的学習、中間支援機能などの地域マネジメント、組織論、学習・教育論の運に関する研究と実践を進めている。

以下を歴任、

- ・アジア太平洋地域ESD国連組織間諮問委員会テクニカル・オフィサー
- ・国連大学サステナビリティー高等研究所客員教授
- ・北京師範大学大学院客員教授
- ・UNESCO ESDグローバルアクションプログラム(PN1:政策)共同議長
- ・環境省SDGsを活用した社会問題・環境問題同時解決支援事業委員長
- ・「国連・ESDの10年」ジャパンレポート有識者委員会座長、ESD円卓会議委員
- ・JICA技術専門員(環境教育)
- ・ESDコーディネーター(文部科学省事業)
- ・NPO法人ETIC.(社会起業家のためのインキュベーション・プラットフォーム)理事
- ・文部科学省・ユネスコ未来共創プラットフォーム事業座長
- ・国際能力開発プログラム、LEAD(Leadership for Environment And Development、米国ロックフェラー財団、事務局は英国ロンドン大学)の日本事務局・学術コーディネーター(システム思考)、ほか

編著書は、『SDGsの基礎』、『SDGsの実践』(事業構想大学院大学)、『SDGs時代のパートナーシップ』、『SDGsとまちづくり』、『SDGsと環境教育』、『SDGs時代の教育』(学文社)、『SDGs探究BOOK』、『SDGsライフキャリアBOOK』、『SDGsダイバーシティBOOK』(宣伝会議、監修)、『探究×SDGs』(朝日新聞)、『ソーシャル・プロジェクトを成功に導く12ステップ』、『SDGs人材からソーシャル・プロジェクトの担い手へ』(みくに出版)、『CLIL 英語で学ぶSDGsの基礎-CLIL Primary SDGs』(三修社)、『SDGsのサイババル』(朝日新聞出版)ほか多数、SDGs時代のESDと社会的レジリエンス研究叢書(筑波書房)主宰

59

60